



本科・日本語科合同合宿のごく個人的な感想

日本語科2年1組 李醒獅

「こんな大雨の中でマジ行きたくないなあ」「そうだね」と私は友達と話していた。まさにその通りだった。あの日は雨が激しい勢いで一日中降り続いた。それは今年の夏で一番の大規模な雨だった。それでも私は、この大雨の中、前日買ったばかりのスーツケースを持って、学校までやって来た。大変だったけど、これも一興だ。実は前日、興奮して寝られなかった。私たちがバスに乗ると、バスはエンジンの音と同時に出発した。

二時間ほどで、私たちは合宿の目的地の九十九里浜のホテルに立っていた。大雨で濡れた鼠のようになった私は、人でいっぱい玄関をくぐりぬけて、部屋まで行って、荷物を置いた。これから楽しいお食事だと思いきや、なんと私たちの名札が食卓に並んでいた。それはそれは、大した心がけだ。私たち留学生と中国語科の学生を話させるため、工夫したのかなあと思いながら、自分の席についた。目の前にいたのは、見知らぬ若者だった。オレンジっぽい髪で、少しばかり怖そうな雰囲気だと思いながら、カレーを食べて、次の集合場所に向かった。幸い、グループの中に好感のもてる同志がいた。私たちは同じグループの友人の不器用さにツッコミながら、二人三脚を走り抜けた。運動会を無事に終え、疲れ切った私たちは再び食堂に移動し、席替え後の席に座った。今度はプリティーガールだった。クセ毛もないマッシュカットでありながら、意味不明の図柄のついたTシャツを着て、指にはレインボー色のマニキュア。いかにも話しかけづらいタイプだ。私は動画を見ながら食事を済ませた。一度も口を開かなかった。交流会といっても、決まった話題とかがないと、不用意に話しかけるのは得策ではないという私のポリシーを重んじたのだ。

二日目の最後のイベントの舞台は、九十九里浜の砂浜だった。海は初めてではないが、皆と一緒に貸し切りみたいな砂浜に行ったのは初めてだった。少しだけ不思議な気分になった。帰りのバスの中で、皆のいびきを聞いて、まるで高一の時の遠足の帰り道と変わらない風景だと思った。そう感じられたということは、すなわち、無意識の中に私は日本の学生を含め、バスに乗っていた皆と私の高校のクラスメートとにあまり違いを感じなかったということだ。

私は最初、期待しなければ失望にもならない、と自分に言い聞かせていた。でも、今回の合宿を終えて、次のイベントが少し楽しみだと思うようになった。

先生からの一言：次回は李さんが話しやすいように、会話の話題を決めることにします。



中国結び講座作品展示

A 先生の新語コーナー



tuìqún “退群”

国際組織離脱。もともとはネット用語で、SNSなどのチャットグループから抜ける「グループ退会」を指した。しかし、現在では国際的な組織の取り決めからの離脱にこの言葉が広く用いられ、一般的に揶揄するニュアンスがある。特にトランプ政権誕生後、米国が環太平洋経済連携協定(TPP)、[パリ協定]、中距離核戦力(INF)全廃条約などからの離脱を次々と表明し、中国のマスコミがこれらを「退群」として報じたため、一躍注目されるようになった。

(A)

第23回校友会中国の旅 —桂林と少数民族— (つづき)

栗原弘子

第4日目 (3月29日 金曜日)

朝食はフロントのあるロビーで頂く。ゆで卵、米粉の麺、漬物、搗き立てのきな粉餅。卵は放し飼いの鶏が生んだばかりのものだろう。どれも物凄く美味しい。食べ物に我儘な私だが、今回は頗る上機嫌である。今日は棚田を見に堂安村に行く。その前に、トン族文化展示中心を見学。民族衣装や銀で出来た装飾品の展示を見る。施設内には藍染の工房もあり、この道何十年と思われるお婆さんが、木槌で布を叩いていた。私たちが体験して良いというので、挑戦した。何度か叩くうちに調子が出てきて「好!好!」と言われて、満更でもないと思いきや、お婆さんが叩くと「カーン・カーン」と澄んだ音が響き渡った。音が根本的に違っていた。

棚田のある堂安村にはタクシーに分乗していく。大型バスは入れないのだ。ガイドの彭さんと研修生で貴州民族大学日本語科の学生でもある回族の馬さんが同行する。馬さんは緊張しているのか、元来大人しい性格なのか、余り話さない。彭さんは旅行会社の部長という肩書きが示すように、有能なキャリアウーマンというタイプの人であった。

平均寿命が73歳のこの村で、83歳で亡くなったという人の葬儀が営まれていた。亡き人の長寿にあやかろうとしたのだろうか、棺を安置した周りに、村中総出かと思われるほど沢山の老若男女が集まって食事をしていた。

そこを通り過ぎ、棚田のある場所に向かう。周囲の山々は新緑であったが、田植えには早いようだった。棚田をながめながら、のんびり歩く。空は青く澄み、空気は新鮮で、長閑であった。旅人として風景を愛でる分にはいいが、実際にこの田を耕し、苗を植え、米を収穫する作業は如何に大変なことか。そんなことを考えて歩いているとレストランに到着。

個人経営の食堂である。名物の「酸魚湯」を中心に料理を味わっていると、先ほどの葬儀に参列したこの店の主人のお父さんが帰ってきた。お酒が入っている上、初めて見る日本人観光客。店の老主人は上機嫌で、葬儀など無かったかのように、あれこれ話しかけてくれ、私たちは楽しく、美味

しい時間を過ごした。肇興村に戻り、夕方からホテルのロビーで、今回の旅の大きな目的であるトン族の人々との交流会を行った。男女十数名からなる合唱団は民族の歌を次々と披露してくれた。音域が広く、声量の有るその歌声は圧巻だった。女性団員の1人はスイスに遠征したことが有るようで、若い頃の倍賞千恵子に似ている気がした。トン族の人は歌が上手くないと結婚できないと言う。トン族でなくて良かったとしみじみ思った。

交流会なので、日中学院としても歌を披露しなければならぬ。夢にも思っていなかった事で、我々は大いに慌てたが、J同学の提案で、「幸せなら手を叩こう」を振り付けを交えて歌ったので、こちらの気持ちも伝わったようだ。合唱団の人々は綺麗な普通話話すので、校友会メンバーも民族衣装や日常生活のことなど、あれこれと尋ねて楽しく交流し、充実した忘れがたい会になった。

第5日目 (3月30日 土曜日)

ホテルを後に、一路黄崗村を目指す。山道をぐるぐる頂上に向かってバスは走っていく。私の体は正直で、防衛本能が働くのか直ぐに睡魔に襲われる。時々意識が戻ると風景は一変しており、バスは村は天空に有るのかしらと思うほど登りつめて漸く止まった。村の入口には鳥居のような門が有り、トン族の人々が数人集まっていたが、我々が予定の時間より早く着いたので、歓迎の準備ができていなかったらしい。彼らはなんとスマホを取り出して、まだ来ていないメンバーに連絡を取っている。近年、中国のITの発達には目を見張るものが有るが、ここでもハッとさせられた。

トン族の歓迎の儀式一歌を歌い、客人に盃に入れたお酒を三回に分けて飲ませ、迎えられる側は手を使わずに飲む一を経て、村の中へ。集会場にもなっているのだろう村で一番古い鼓楼の下で、今年27歳だという村長の挨拶を受ける。ここでも歌の歓迎を受け、我々も共に輪になって踊り、又「幸せなら手を叩こう」を歌い、何とか無事に終わる筈がアンコールが起き、どうしようかとあれこれ逡巡したが、さすがは日中学院校友会。Y同学の閃きで「ふるさと」を歌い、友好を保つことができた。

黄崗村は肇興味村より更に素朴なところでほぼ

自給自足。

村長曰く、起きたいときに起きて、疲れたら休むという生活だそうだ。そのためか、若者は都市に出てなじめず、村に帰ってきてしまうそうだ。中国政府が少数民族の保護に力を入れている為、義務教育と医療費は保証されていると言う。確かに村で一番立派な建物が小学校であった。この村では建物は全て木造でなければならない決まりなので、レンガ造りの村長の事務所は取り壊さなくてはならないそうで、村長は仕事があるからと途中で帰って行った。代わりに20歳の副村長が残る部分を案内してくれた。若い人たちが活躍している村であった。

バスは来た時とは別の道を走り芭扒村を遠望する。昼食は建築中の店舗が並ぶ一角にあるレストランで、名物の「養生板栗鶏鍋」を中心に料理をいただく。辛い料理もあるが、癖になりそうな辛さで美味しい。添乗員さんの気配りか、今回の旅は実に地元の料理が美味しい。トン族の村に別れを告げて、従江駅へ。夢から覚めたような気分だ。

ここで、ガイドの彭さんと馬さんは貴陽に、私たちは広州へと向かうので、駅でお別れをした。広州まで4時間の鉄道の旅だ。車窓は貴州省から江西省へ入るとカルスト地形に変わり、更に南下して夜の広州に入った。湿度が急に高くなった。この日は旅行の最後の晩餐会となるので、いつものことだが、高級なレストランでの食事が待っていた。広州名店の「泮溪酒家」。飲茶と子豚の丸焼きで旅の終わりを締めくくった。

第6日目(3月31日 月曜日)

宿泊した東方賓館は壮麗なホテルであった。出発までの自由時間は各自で買い物等市内を散策。白雲空港では、搭乗予定の飛行機の到着は遅れたが、追い風で到着時間は早まり無事すんなり帰国できた。

今回の旅の成果は桂林の風景もさることながら、なんとと言ってもトン族の人々との出会いであり交流であった。民族衣装に直接触れ、声量豊かな歌声を聞くことができた。中国語を学んできたお陰で、拙いながらも言葉を交わすことができた。思うにこれから中国が変化し発展していく中で、彼らの生活はどう変わっていくのだろうか。現代化を取り入れながらも、その波に飲まれることなく、民族の伝統文化を守り、いつまでもあの歌声が続くことを、「亮布」を打つ音が各戸で響き続けることを願わずにはいられない。何年か後に又彼の地を訪れたいと切に思う。

今回も旅行に際して、色々な方々のお世話になった。改めて参加して下さった校友会の方々、添乗員さんを初めとする旅行者の方に御礼申し上げます。ありがとうございました。



学院長の思い出話12

初駐在と電話恐怖症

1977年5月、初の北京駐在。事務所兼住居となったのは、北京飯店東楼4008号室。単身赴任の1人事務所でした。

早速みまわれたのが「電話恐怖症」。当時は市内電話の音もとぎれとぎれで、まるで「宇宙のあなたからかかってきた」よう。相手が何を言っているのかさっぱりわかりません。私は「すぐに伺います」と言い、急いでホテルのタクシー乗り場に。しかし、利用客は増えても、タクシーの台数は増えなかったため、毎回イライラする順番待ち

を体験しました。

北京で年越しをした私は、他社の駐在員たちと一緒に正月の西安旅行を企画し、実行しました。今では死語になった「旅行証」の壁を打ち破ったことが記憶に残っています。

1978年2月、北京駐在は終了しました。76年の文化大革命終了と78年の改革開放開始のはざま、中国人は国家の将来に不安を感じており、内部と外部の壁は厳然として存在。中国内部の事情はほとんどわかりませんでした。

(片寄浩紀)



図書室 だより

モバイル決済システムの 先駆者

★『アリペイを生み出した巨大ユニコーン
企業 アント・フィナンシャルの成功法則』
由曦 著 永井麻生子 訳 中信出版日本



中国のモバイル決済システムの「アリペイ」(支付宝)。現在ではネット販売はもちろん街のお店の支払いでも使え、ユーザー同士の送金も可能なシステムで、中国ではすでに広く普及しています。アリペイは、中国のECコマース企業アリババが始めたタオバオ(淘宝网)という消費者間取引サイトで、いかにユーザー同士が安全に取引できるか、ということで担保取引システムを始めたことがその始まりとなりました。タイトルにあるアント・フィナンシャルは、アリペイを主力サービスとして運営するアリババグループの金融関連会社の名称です。本書はアリペイ誕生から今日までのこの

アント・フィナンシャルの歩みを記しています。アリババやアント・フィナンシャルの経営哲学などを知ることができ、特にビジネスに興味のある方におすすめです。

★今月の新着図書(著者名・出版社略)

- 『中国S級B級論 発展途上と最先端が混在する国』
- 『地球の歩き方 台湾 2019-2020年版』
- 『地球の歩き方 ガイドブック 北京 2019年-2020年版』
- 『中検準1級・1級試験問題 95・96・97回 解答と解説』
(ほかに2級、3級、4級、準4級あり) ほか多数

《寄贈》

☆夏瑛様・陳昭様(共編者)より

『寮・生 後楽寮を生きる人々』新世界出版社

本学院と同じ建物内にある後楽寮は、主に中国から公費の留学生を受け入れている学生寮で、すでに80年の歴史があります。本書は、戦中(1940年代)から現代まで後楽寮にお住まいになったことがある方々の入寮時代の思い出を記した文集です。

日中学院図書室(2階奥)

開室時間: 12:00-18:45 (月-金)

12:00-18:00 (土)

※図書室は8月6日(火)から8月18日(日)まで夏休み休室となります。

8月の日中学院

星期日	星期一	星期二	星期三	星期四	星期五	星期六
				1 ●夏休み開始 (本科、日本語科)	2	3
4	5	6 ●別科: 夏期集中講座 (~10日) ●別科: 夏休み (~18日)	7	8	9	10
11	12 ●休日 ●閉門 (~18日)	13	14	15	16	17
18	19 ●開門 別科 授業再開	20	21	22	23	24
25	26 ●日本語科授業再開 ●避難訓練	27	28	29	30	31 ●本科生のための公開講座 9:30~
●9月の日中学院 ・2日…本科 授業再開/避難訓練 倉石奨学金募集 ・4日…本科 2年個人面接(~6日) ・7日…倉石奨学金締切		・11日…本科 倉石奨学金発表 ・13日…本科 追試(~20日) ・14日…千野先生講演会(13:00~15:00) 別科 公開(入門)13:00~15:00 ・20日…別科 公開(入門)18:45~20:45		・24日…別科 休み(~28日) ・26日…別科 公開(入門)18:45~20:45 ・28日…別科 朗読大会 ・30日…別科 274期間最終日		